

されており、同様な墓域区画と考えることができる。

2. 『田辺史』氏とその氏墓をめぐって

1. 田辺史氏の墓域

田辺史氏は、田辺廃寺を建立した氏族と考えられ、その居住区域は現在の柏原市田辺を中心とする一帯であろうとされている。集落は、この地域の調査で柏原市教育委員会によって、掘立柱建物・井戸状遺構・溝跡が発見されており、田辺地域の三つの台地上に立地することが知られ、その中央に田辺廃寺がある。この氏族の墓域と考えられるのが、今回調査した田辺古墳群・田辺墳墓群であろうと考えている。その根拠とするところは、次の3点である。

1. 立地的に田辺台地周辺には、おいなり古墳を除くと古墳時代後期～奈良時代の古墳・墳墓群は認められず、最も近接する芝山古墳群でさえ北へ1.1km、誉田山古墳群は南へ1.2km、玉手山東横穴群で西へ0.9km離れている。地理的にも誉田山古墳群・玉手山東横穴群は、原川左岸にあたり対岸となる。芝山古墳群は府分布図に記載されているが、その存在や具体的な内容は不明であり、いま立論の対象にしない。このようなことを総合すると田辺池谷を挟んで300m距離をもって隣接する本古墳群・墳墓群がその瑩域として最も妥当であるといえよう。

2. 物的証拠としては、本墳墓群内の8号墓使用の方罫（1辺29cm、厚さ9cm）が、田辺廃寺東塔所用の方罫と寸法・手法・胎土・焼成において同一であり、寺用の罫が転用されているといえる。さらに、9号墓の外容器として使用されている平瓦も、田辺廃寺所用の一枚造り平瓦と酷似しており、そうした点で田辺廃寺を建立した氏族の墳墓であるといえることができるのである。

3. 古墳群は、墳墓群の東側40mの同一尾根上に立地しており、7世紀に始まり8世紀初頭で造墓をほぼ終了している。西側の墳墓群は、8世紀初頭に始まり8世紀中葉まで造墓を行っており、この時間的な相異を通じてみる限り、同一氏族の墓域が東側の丘陵腹から西側の尾根先端へと占地したことを示唆しているものとみることができる。

こうした3点から本古墳群・墳墓群は、田辺廃寺を建立した氏族の古墳群・墳墓群であり、



第39図 田辺史氏の墓域

すなわち田辺史氏の墓域と見なすことができると考えられるのである。

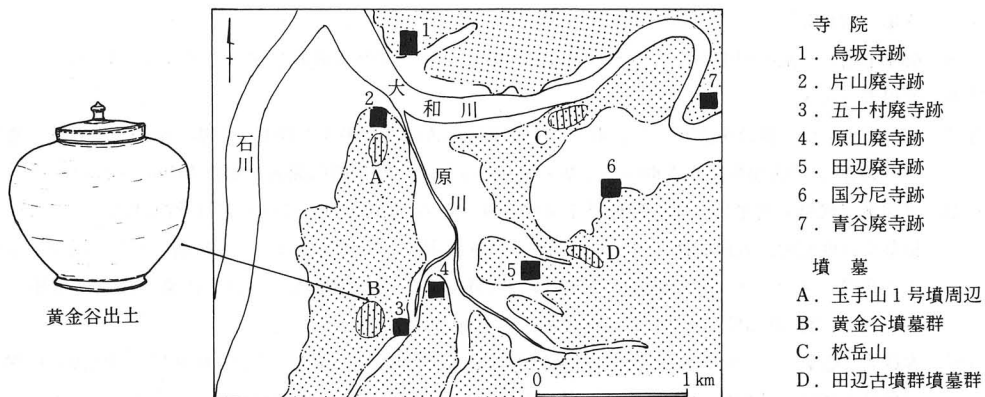
古墳群は東群A・Bグループと西群A・B・Cグループの5単位群から構成され、時期的にその系譜がたどれる。この単位群は、田辺史氏の有力家父長層の戸主の死を契機に造墓された単葬墓である。造墓は、試案で示したように東群A・B家族が7世紀前半より中葉まで3世代にわたって造墓を行っている。やや遅れて西群A～C家族は、7世紀中葉に方墳として出現し4世代にわたって造墓を行い8世紀初頭に造墓をおえている。東群のA・B家族は、1号墳・3号墳の段階では直径8.5m前後の円墳を造墓しているが、5号墳・6号墳になると直径4.5m前後の円墳となり、墳形の規模も石室の規模も小型化している。しかし、円墳と云う墳形と無袖式横穴式石室様式は踏襲されている。西群のA～Cの家族は、造墓1段階は方墳として西尾根に立地し、内部主体は無袖式横穴式石室である。造墓2段階で小石室が内部主体となり、墳形も円墳となるものや一辺4.5mの方墳となるものがあり、小型化が著しい。さらに造墓4段階になると、木棺直葬を内部主体とした直径3m前後の円墳となる。このように西群では、無袖式横穴式石室→小石室→木棺直葬と云う内部主体の変化が系譜的にたどれるのである。東群・西群の2群は、古墳の占地・形成過程・存続のあり方が異なり、東群では1単位群で一定空間に造墓地が設定されているのに対し、西群は数単位群で上段・中段・下段と云う様に造墓空間が各世代ごとに移動するようである。このような造墓地の占地は墳墓群とも類似する面として注目される。また、1号墳の周溝内には、土器と共に鉄滓が供献されており、被葬者の性格が小鍛冶関連の職種と関係するものと考えられよう。^{註21}

墳墓群は西南地域の削平が著しく、群の系譜は明らかにしえない。これらは全て火葬墓で、墓道によって上・下段に区画され、その内部に8世紀初頭から8世紀中葉まで造墓がなされている。特に火葬墓は8世紀前半に出現しており、田辺史氏が中央の埋葬方法をいち早い段階から採用していることを示している。このことは、田辺史氏が百済系の渡来系氏族であるとされる要因を求めることができよう。そのあり方は、文献で見られる「氏墓」^{註22}として把えることができよう。墓域内には特別な厚葬を示すものはなく、小規模で木櫃・土器を蔵骨器とするものが多い。この事は墳墓内に墓誌・銅銚帯等を副葬した厚葬はなく、田辺地域を本貫地として朝廷に仕えた宮人墓を含んでいない可能性が濃厚である。そのあり方は、この田辺地域に居住する田辺史氏の有力家族の墓域であろう。また、本古墳群・墳墓群は、墓地として一部9世紀末～10世紀と、12世紀頃に古墳が再利用されている以外には全く後世に利用されておらず、遺構の重複は認められない。奈良時代以降もその存在が意識されていたかのようであるが今では立証することができない。^{註23}

2. 周辺の墓域

7世紀中葉から8世紀にわたる墓域は、旧安宿郡（柏原市内）内では、4ヶ所を認めることができる。1は船氏の墓誌を出土した松岳山周辺、2は玉手山丘陵の北端、玉手山1号墳や片山廃寺周辺であり、3は玉手山9号墳の東側斜面の黄金谷、4は今回調査を実施した田辺古墳群・墳墓群である。これらは、1の船氏の墓域を除くと全て古代寺院が周辺に占地している。その内でも、黄金谷古墓は、金銅製蔵骨器に和銅3年の墨書銘があり、周辺から蔵骨器が多量に出土したと云う。文献上では、船氏の本貫地、野中寺の地の南側、『寺山』に葛井・船・津氏の共同墓域であったとされており、同様な事例として本古墳群・墳墓群をあげうるに至った意義は大きい。

これらの知見をもとに旧安宿郡内の各種の葬法を用いた蔵骨器があり、被葬者を故地に火化した後に拾骨し、この墓地に搬入し造墓したものである。この地域に所在する黄金谷墳墓群や田辺墳墓群は、河内出身である道昭の火化以後、直ちに火葬が行なわれた地域といえるであろう。旧安宿郡内で墳墓群の墓域を形成した氏族としては、今回の田辺史氏・船氏以外には必ずしも明らかでないのが現状である。しかし、古代寺院の背後に立地しているものが多く、各寺院の建立氏族との関連や氏族名の探求が今後の課題となるであろう。このように、古代の渡来系氏族中でも著名な田辺史家の墓址の実態が明らかとなった。その中でも特に墓域の変遷・群構成・墳墓の構造・造墓時期等の若干の問題について述べ簡単に問題を提示するに留まったが、残された課題も多く後日あらためてその責を果したいと考える。



第40図 墳墓の分布